それぞれのシーズン

四月朔日澪

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

線香花火が人生を四季のように表すように人生にはシーズンがある。『秋の頃』底辺校のいじめられっ子―佐藤隆之は読モの彼女と付き合っていた。不良からの圧力、周りからの目により自分が彼氏でいていいのか悩むある日、寂れた商店街にポツンとあるコーヒーショップに入り・・・ そして彼女にも大きな秘密が・・・

目次

秋の頃1 ―― 1
秋の頃2 ―― 9
秋の頃3 ―― 14
秋の頃4 ―― 22
秋の頃5（終） ―― 29

秋の頃1

天国と地獄―県内一の県立進学校があると思えば、クズの掃きだめのような底辺校が所在する。そのことから岐阜県の西部にある網岡市の高校群はそう呼ばれている。その地獄である拓流大学網岡高等学校（通称・濁流）はいじめ、万引き、暴力沙汰・・・ｅｔｃと底辺校の最頂点とも言える高校だった。入学者数の減少を防ぐため、上層部はタレント学科を設立し大手事務所と契約し濁流高校には芸能人が次々と入学した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

濁流高校―体育館裏

「テメェなめてんちゃうぞオラァ」

金髪の男は体格的にも劣勢の少年に無慈悲に蹴りを入れる。少年は無抵抗に蹴りを受け地面に転がる。

「立てよ。オイこれで済むと思うなよ」

「ごめんなさい・・・・」

「ごめんで済んだら警察要らねぇんだよ」

地面に倒れる少年に金髪の男は鉄砲玉のように蹴りを入れ続ける。少年の視界には

タバコを吸う教師の姿が見えるが教師は目を逸らす。この高校は明らかな暴力があっても事なかれ主義の教師が黙認する無法地帯なのだ。
「俺、昨日言ったよな?.涼佳に付きまとうのはやめろって」
「…　僕は言いましたけど…　その…　高木さんが…」
もごもごと話す少年の髪を金髪の男は無造作に鷲掴む
「言い訳はいいんだよ。『分かったな?.』」
「はい…」
金髪の男は「涼佳にチクったらタダじゃ置かねぇからな」と脅し文句を置き残し去り、少年―こと佐藤隆之は拷問から解放され、制服に付いた砂を払う。佐藤隆之はこの濁流高校では弱者だ。中学時代から勉強が出来なかったため家が近くという理由もあり濁流高校に入るしかなかったのだ。不良やならず者予備軍だらけの中に入学するなどオオカミの群れに子羊が突入するようなものだ。黒髪に眼鏡、勉強もスポーツも駄目で顔も可でも不可でもない褒めるところが何もない凡庸な少年だが神は過不足の補填なのか試練なのか彼にイチブツを与えた。
「あーやっと来た!.先に帰ったかと思った」
「ごめんなさい」
校門で携帯片手に隆之に声をかける美少女は高木涼佳（りょうか）、例のタレント学科

所属の読者モデルであり隆之の彼女である。オキシドールで脱色した周りのいやらしい茶髪とは違う艶のある栗毛色の長い髪、漆のような黒い瞳と長いまつげ･･･ 網岡のような小都市にいることが奇跡的な女子高生だ。そんな彼女の彼が平凡で何のとりえもない男なのだ多くの男は妬むだろう。先ほどの金髪の男もその一人だ、彼はそんな男子により酷い仕打ちを受けてきた、彼女が知らぬところで･･･

「なんで電話にも出なかったの?鬼電したのにぃ」

涼佳は頬を膨らませて怒る。隆之は携帯を開くと待ち受け画面には「不在着信15件」と乗っていた。

「ごめんなさい･･･」

「携帯見ないの?」

「見るような用事もないので･･･」

「見せて見せて～」

涼佳は無邪気に隆之の携帯を取り携帯をいじる

「本当だぁ～何もアプリ入ってない～リュウ君おじいちゃんみたい～あはは」

「携帯は連絡用とか調べものに使うものだと思ってるので･･･ そのゲーム機にしたりするのは･･」

「リュウ君まじめくんだもんね。そっか～えへへ。リュウ君のこと許しちゃう～ほら、

ニューアクアに行こ～」
　涼佳は隆之の腕を組み、ショッピングモールのニューアクアに向かった。駅への連絡橋があり、帰り道の途中にあるニューアクアのフードコートは高校生のたまり場である。ハンバーガーのセットを二人は買い、とりとめのない話をしていた。
「いいアクセサリーを見つけたんだけど～今度リュウ君と一緒に行きたいなぁ♡って買わなかったんだ～」
「じゃあ今度一緒に見に行きましょう」
「やった～リュウ君とデート♡絶対に予定空けておくね！いつがいいかな～」
「僕はいつでも大丈夫ですから・・・　高木さんの空いているときに合わせますよ」
「早くしないとあのアクセサリー無くなっちゃう～再来週とかどうかな！」
「いいですよ」
「うんじゃあ決まり～それでリュウ君は何かあった？」
「え？」「話題～」
「いや・・・　そんな・　何も・・・」
「え～つまんない～私ばっかり聞いてもらってるもん。リュウ君のお話も聞きたいな♪」
　家に帰ったら何もせずただ寝るような隆之に話題などあるわけもなく頭を振り絞っ

ても一つも出てこなかった。

『分かったな?』

隆之は金髪の男に言われたことを思い出した。隆之は前々からあの男から別れないと酷いぞと脅されていた。しかしここまで来ても別れを告げることが出来ず放課後にリンチに遭うのがここ最近のルーチンになっていた。今がそのチャンスではないか・・・

隆之は声を振り絞り、

「た、高木さん・・・・・ その・・・・ わ・・・ わ・・ 和歌って誰の句が好きですか?」

自分でも思った。『お前何いってるんだ』涼佳はよく分からない質問に首をかしげていた。

「う~ん。ばしょーさん?」

「いや、松尾芭蕉は俳句なので歌人ではなく俳諧師なんです・・・」

網岡は松尾芭蕉の奥の細道むすびの地である。網岡に住んでいるものなら皆が知っている偉大な偉人で市のマスコットも「ばしょーさん」というくらいだ。

「え?俳句と和歌って違うの~」

「えっと・・・ 俳句は5・7・5の17字で和歌は5・7・5・7・7の31字で・・・ ってそんな話じゃなくて・・」

「リュウ君は誰の歌が好きなの~?」

「そうですね。どれも捨てがたいですが正岡子規ですかね…　正岡子規は日本の歌壇中興の祖で俳句のイメージが強いですが、和歌も大変秀逸で『松の葉の葉毎に結ぶ白露の置きてはこぼれこぼれては置く』という和歌は松の葉に滴る露を写実的にしたためた子規のセンスは光っています」
「リュウ君、古文の先生みたい～」
「あ、いや…　そういう話じゃなくて…　わ…」
「あ、いっけな～いもうすぐ撮影だ～これ食べていいよ～」
　食べかけのポテトを隆之に渡す。
「片づけお願い～あ、そうだ」
　フードコートを小走りして少し離れたところで振り返り、
「また今度お話聞かせてね。リュウ君♡バイバ～イ」
「あ……　じゃあまた明日」
　隆之は小さく手を振る。今日もまた言えなかった…　またしばかれるなぁ…
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
　網岡駅改札―
「やっほ～」
「どうだった」

「ん～今日も言えなかったよ～」
「本当にトロいやつだぜ。まぁしばらくはサンドバッグにさせてもらうかな。ったくあいつも馬鹿だよな。お前みたいなやつが涼佳みたいな上玉と付き合えるわけねぇだろって。とんだお笑い草だぜ」
「‥うんそうだね～ほら行こ～」
「今日も大須でお前のために俺のビートを響かせてやるぜ」
「キャーカッコイイ～♡」
涼佳は金髪の男の腕を組み二人で改札を抜けた
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「はあ‥‥」
隆之は茫然自失で連絡橋を渡る。今日も別れを告げられなかった。というのも自分から彼女に告白したわけではなく彼女から告白された手前、振ることに躊躇いがあるのだ。彼は二人がグルなことも知らず解決できぬ悩みを抱いていた。
連絡橋から駅の改札、そして南口に出る。学校とショッピングモールは北口に出てすぐだが、自宅は南口にある。南口は寂れた商店街が続く。そんな寂しい帰り道を歩く‥‥
「ん？」

隆之はあるお店に目を止める。コーヒー専門店とある。商店街には数年前市の『あみおかコーヒー』キャンペーンでコーヒー専門店が乱立したが宇田川榕庵（＊１）と網岡市との関連性がイマイチだったことからバタバタと閉店していった。まだその生き残りがあったとは・・ 落ちこんだ気持ちを収めるのに一杯飲んでみるか・・・

隆之の身体はコーヒー専門店に向かっていた。

＊１）宇田川榕庵・・ 長崎でコーヒーを飲み、コーヒーに「珈琲」と当て字を付けた中津藩藩医。網岡市のモデルとなっている岐阜県大垣市でも実際「おおがき珈琲」プロジェクトがあったが、宇田川榕庵の父が大垣藩の江戸藩邸掛医であった（父もまた大垣藩の出身ではない）という接点だけでまちづくりに使うのはおかしいという意見と岡山県中津市から抗議があったことから事業は凍結した。

秋の頃2

誰かのプロローグ―幼稚園くらいの頃

「大きくなったらタカくんと結婚する～」

「うん！幸せにするよ！」

「タカくん好きぃ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

気がつけば身体はコーヒー専門店に向かっていた。夕食までは時間があるし、一杯だけ飲んでいこう。ドアに手をかけると額にドアをぶつける

????

まだ開けてもいないのになんでぶつかったんだろうか？前を見ると無愛想な顔でこちらを見てくる年上の女性がいた。どうも店から出ようとしていたようだ。

「ご、ごめんなさい」

体をドアから離し彼女を通す。彼女は無言で店を出た。いよいよ入ろうとすると

「店じまい」

「え？」「だから閉店」

彼女は看板を片付けていた。閉店だったようだ、まぁまた機会があれば高木さんと入ってみるかな…　帰り道に引き返そうとすると首襟を掴まれる
「…　ちっ、特別だからな。入りな」
「あ、ありがとうございます…」
そんなに残念そうに見えたのだろうか。閉店のようだが、お店に入れてくれた。中はカウンターだけのこじんまりとしたお店だった。カウンターに座るとバンッと水を置かれた…　やはり迷惑だったのだろうか。
「注文は？」
「じゃ、じゃあブレンドで…」
「ない」
「あ、それじゃあ…　き、キリマンジャロ…」
「あ？」
「す、すいません…　じゃあおすすめで」
お姉さんは面倒臭そうに冷蔵庫からウォーターサーバーを取り出し、アイスコーヒーを入れバンッとアイスコーヒーの入ったコップを置く
「とっとと飲んで帰りな。コーヒーの味も分からねぇガキが来るとこじゃねぇよ」
ずっと無愛想な理由が分かった。そりゃそうだよな高校生風情が背伸びしてコー

ヒー飲むなんて生意気だよな‥ お姉さんの言うとおり早く飲んで帰ろう。

……

「美味しい‥‥ ウォータードリッパーで抽出した本格的な水出しコーヒーですね」

「！よくウォータードリッパーなんて知ってるな高校生。美味いだろ？うちのコーヒー」

先程の態度とは違い、お姉さんはとても嬉しそうに感想を聞いてきた

「美味しいです！時間をかけて抽出される水出しコーヒーは風味がいいですね」

「分かってんじゃねぇか高校生。さっきはごめんな、バカにして。いやぁ濁流の連中がたまに来んだがどいつもこいつもコーヒーの味も知らねぇガキばっかりでよぉ君もその類だと思ってな」

「いや‥‥ そんな、こんな若輩者がコーヒーなんて飲むなんて烏滸がましいことはご最もですから」

「そりゃ違うぜ高校生。味が分かるのに年齢なんて関係ねぇよ。まぁゆっくりしていきな」

「でももう閉店するんじゃ‥」

「あ？よく見てみ。閉店は１８：００、常連以外が来んのヤダから看板片付けただけよ」

「あ‥ そうでしたか」

「あ、そうだ。高校生にならうちのブレンド飲ませてやるよ。私からの奢りだ」
　お姉さんはそう言い、コーヒー豆を電動ミルに掛け挽いた豆をドリッパーにセットする。沸騰前のお湯を淹れていく
「お待たせ…　じゃあ話を聞かせてもらおうか」
「ありがとうございます…　えっと…　お話とは」
「あぁ？んなシケた面でうちのコーヒー飲むつもりじゃねぇだろうな？バーじゃねぇんだぞ、とっとと吐け！顔見てるだけで不味くなる」
「…　実は」
　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「なんだ高校生、んな奴に虐められてんのか」
　彼女がいること、別れるよう脅されていること、本当に自分が彼女の彼氏でいいのか悩んでいる事を打ち明けた。
「…　バカだなぁ。んなもん高校生、お前の気持ちだろ」
「気持ち…　ですか…」
「高校生は彼女のこと好きなんだろ？」
「はい……　好きです…　！」
「じゃあそれでいいじゃねぇか。周りがどう言おうと好きなら図々しく彼氏でいりゃい

いんだよ」
「・・・ でも、僕彼氏らしいことも出来てないし顔も良いわけでもないし、ファッションセンスも悪いし・・」
「なっさけない奴ゃなぁ・・・ じゃあお姉さんが人肌脱いでやるか。高校生、名前は?」
「佐藤隆之です」
「じゃ、隆之!お前をモテる男にしてやるよ」
「いや・・・ その・・ モテたいとかそういうんじゃ・・」
「ったくうるせぇな。んなんじゃ彼女取られるぜ?男は野獣なんだからお前よりモテる奴が狙ってんだ自己防衛ぐらいできねぇとダメだろ」
何か面倒な事になったが、お姉さんの好意を反故にするのも気が引ける。だけどモテるって何をするんだろうか?
「じゃ・・・ お願い・・ します」
「よし来た!じゃあ今週の土曜は服装からだ!女もイチコロのファッションって奴を教えてやる」
「はい!」「よしいい返事だ。よろしくな隆之。私は聖川藍魅、アイミって呼んでくれ」
こうしてアイミお姉さんとの厳しい恋愛レッスンが始まりました。

秋の頃３

読取新聞朝刊

『高校生銃撃に巻き込まれ死亡―暴力団抗争激化―

昨夜未明、愛知県名古屋市中区で網岡市在住の男子高校生が銃弾計１０発を受け死亡しているのが発見された。中区の繁華街大須では広域暴力団・東城会と名古屋を中心に勢力を広げる式部組との縄張り争いが激化しており、これまでにも東城会幹部が死亡するなど愛知県警は男子高校生が暴力団の銃撃戦に巻き込まれたと見て捜査を続けている。』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

濁流高校体育館―

高校では緊急集会が行われていた。昨日の夜に起きた銃撃事件の男子高校生というのは僕を虐めていた金髪の男・福本くんだった。彼には入学してから散々暴力を振るわれてきた。僕みたいなタイプが気に食わないのか特に僕を痛めつけていた気がする。そして僕が高木さんと付き合うようになってからは余計酷くなった。毎日放課後に呼び出されては僕に高木さんと別れろと脅迫をしてきた。僕は高木さんにそんなことを

言える勇気もなく昨日もまた体育館裏に呼び出されていたけどもうその呪縛から解き放たれると思うと福本君には悪いけど何だか心が晴れた気がする。

放課後は1年ぶりくらいにまっすぐ高木さんの元に向えた。

「リュウくん、今日は早いね」

「え、はい。用事が早く済んだので」

「……大丈夫だよリュウくん??私分かってるから。あいつが死んでくれたから私たちの大事な時間も伸びたね??

当然の報いだよね。天罰だよね、だって私とリュウくんの大事な時間を無駄にするだけじゃなくて、仲を引き裂こうなんて撃ち殺されるだけじゃ罪滅ぼしにもならないよ……ね?リュウくん?」

「いつから知ってたんですか…」

「リュウくんがやけに『わ』から始まる質問をするからー?あと友達のモデルが体育館裏でリュウくんが金髪の男にボコボコにされてるって。それ聞いて本当にあのゴミクズ〇そうと思った…だって私のリュウくんにゴミクズの分際で触れるなんて許せないし、許されないんだから。リュウくんごめんね?痛かったよね?怖かったよね?でもいつかあのゴミクズ私の手で〇ろうと思ってたから、断腸の思いでリュウくんが痛めつけられるのを放って置いたの。でももう大丈夫だよ。私とリュウくんの邪魔をする奴はも

う居ないから。また現れても今度は私が守ってあげるからね？」
「……怖い…」
　虚ろな目でまくしたてるように話す彼女につい出てしまった言葉。それが出てしまった時にはもう手遅れだった。高木さんは豹変する。
「コ……ワイ？リュウくん、誰が怖いって？」
　高木さんは僕の首を手で絞める「苦しい」と声を出すが彼女には聞こえていない。
「リュウくん、誰が怖いって？私は弱くて何もできないリュウくんを守ってあげるって言ってるのに怖い？冗談だよね？」
「う……ぐ…高木さん…ぐるしい…」
「リュウくん？怖くないよね？こんなに優しくしてるんだから怖い訳ないよね？答えてリュウくん。ほら…」
「…ぐるじい……」
　絞める手の力は一層強くなる。否定をしたくても声が出てこない。それは呼吸ができないのと恐怖心からだと自分でも分かった。
「リュウくんも他の奴らと同じなんだ…私が……だから……リュウくんだけは違うと思ってたのに」
「た、高木さん……それは違う……高木さんは高木さんだから…」

声を振り絞り反論をすると手が緩んだ。
「本当？リュウは絶対に離れない？私が……でも」
「怖いなんて言ってごめんなさい…けど、高木さんにはそんなこと言わせたくなくて…」
涙を流す高木さんを抱きしめる。
「リュウくんは優しいね……独り占めしたくなっちゃう（ボソッ」
「落ち着きましたか…？」
「うんっ♪ごめんねリュウくん、お詫びに何かご馳走するよ～」
「えっとじゃあ昨日僕、コーヒー屋さんを見つけたんですけど一緒に行ってみませんか？」
「リュウくんから誘ってくれるなんて珍しい！うん行こ～」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
網岡駅南口商店街―
「南口に来たの初めて～」
「高木さんの家は北側ですもんね」
南側は市外から来る生徒はもちろん、市内から通学する生徒でも行くことはほとんどない。僕も昨日たまたま見かけただけで商店街に行くことなどないのだけど。
「ここです」

「へぇこじんまりしててリュウくんが好きそうなお店だね」
　中に入るとアイミお姉さんは暇そうにしていた。こちらに気がつくと「いらっしゃい」と声をかけ水を出してくれた。昨日とは違い、トンと静かに置いていた。
「ブレンド２つで」
「はいよー」
　アイミお姉さんは豆をミルにかける。高木さんは物珍しいものを見るように目をキラキラさせながらその姿を見ていた。
「なんかジロジロ見られてコーヒー淹れるのは緊張するな」
「ごめんなさい。こういうところ来るの初めてで～つい見ちゃって」
「隆之の彼女か？」
「：はい！リュウくんの彼女で～す」
　高木さんは僕の腕にしがみつき自己紹介をする。アイミお姉さんは「可愛い彼女じゃねえか」と高木さんを褒める。高木さんはあまり嬉しそうではなかった。同性に言われてるのはそんなものなのだろうか：
「お待ち」
　アイミお姉さんはコーヒーを出すとカウンターにあるパイプ椅子に座り休憩していた。僕たちの邪魔をしないように気を配ってくれたのだろう。

「なんか飲むのがもったいないね」
「うん… そうですけど、熱いうちに飲んでもらえることがバリスタとして嬉しいことですから」
「じゃあいただきます… うん。なんか美味しい気がする」
傍からすればとても失礼な感想だけど彼女からすれば褒めているつもりだ。それからいつもフードコートでしているような他愛もない話をする。長居をして申し訳ないと思っていたが、僕ら以外に客はなくアイミお姉さんも寝ていたので1時間ほど居続けた。
〜〜
「リュウくん、ちょっとマスターさんと二人でお話したいから先に帰って貰っていいかな?」
「? いいですけど…」
僕は店を出て家に帰る。コーヒーを淹れるのを見て感動してたもんな。なにか聞きたいことがあるのかな…
＊＊＊＊＊＊＊＊＊
コーヒーショップ―
「毎度」

藍魅がお代を貰うと、涼佳は話を始めた。
「昨日リュウくんに聞いたと思うんですけど、リュウくんを虐めてた男死んだんですよね。ニュースになってる男子高校生の銃撃事件」
「それでリュウくんを虐める奴は消えたし、私もリュウくんのことが好きだし・・」
「あのさ」
藍魅は言葉を遮る
「私だって暇じゃねえんだ。本題に入ってくれよ」
「・・・・・　はっ、じゃあ言いますね。リュウくんに入れ知恵を仕込むのはやめてくれませんか？
私はリュウくんの今のままが好き・・・　リュウくんだけは私を受け入れてくれるから他の女に取られるようなことはしないでくれますか？そもそもはリュウくんに自信をつけさせるための事ですよね？いいんです、リュウくんに自信なんて無くても私が付いてるから・・・　ですからもう・・」
「断る」
「え？」
「私は隆之に頼まれたんだ。隆之から断られるならともかく彼女のあんたから断られて、はい、そうですか。なんて答えられねえよ。隆之との約束を破ることになるからな」

「・・・・そうですか。じゃあまた来ますね。タダで済むと思わないで下さいね・・ふふっ」

秋の頃４

土曜日ニューアクア―

休みということもあり、網岡駅近くのショッピングモール・ニューアクアは人で溢れかえっていた。しかし殆どは連絡橋を通じて駅へ行く『通行人』で利用者は５分の１もいない。そんな中で隆之は藍魅を待っていた。約束していた恋愛レッスン第一回目。今回は服装についてレクチャーしてやると息巻いていたが…

「待たせたな」

「いえ。今来ましたから」

藍魅は雑誌で見るようなオータムファッションでやってきた。元々体型が恵まれているのでより見栄えがする。それに比べると隆之はチェックのシャツにジーンズ姿である。通行人の誰もこのダサ男があの読者モデル高木涼佳の彼氏とは思うまい。

「ったくなんだよその恰好は」

「選んだんですけど…」

「センスがない」

「うっ…」

「チェック柄って一昔前のオタクか！それにジーンズもボロボロじゃねぇか」
「これってダメージジーンズってやつじゃ」
「故意的じゃなくて自然破損だろこれ！年季の入ったヨレヨレのジーンズはダメージって言わないんだよ。謝れジーニストに、木村〇哉に！」
「す、すみません」
「それは隆之が選んで買ったのか？」
「いえ、母親が」
「お前は着せ替えリカちゃんか！くぅぅ・・そりゃファッションセンスがないわけだ。まぁ教えがいがあるか。じゃあ早速行こうか」
「どうかお手柔らかに・・」
　隆之たちはファストファッションの店に入った。隆之自身でこういった店に入ることはない。着られればいいというほど服装には無頓着なので藍魅に先ほど着せ替え人形と言われても仕方のない状態だった。隆之はメンズの服を物色していると藍魅が話しかけてきた。
「あの彼女とはそういう話はしないのか？読モなんだろ？」
「してはくれるんですが、呪文のような言葉が飛んでくるので全くついていけなくて・・」
「服屋にも行かないのか？」

「行きませんねぇ・・　僕はこのままで十分だって言うので」
「ふぅん」
　藍魅は涼佳に恫喝されたときのことをふと思い出した。放っておいても他の女になびくなど１ミクロンの可能性もないがそれでも可能性を１％でも高めることを嫌がったのだろう。しかし、それが将来的に隆之のためになるかと言えば違う。藍魅はあの後お節介かと思ったがある種の老婆心というか母性に駆り立てられ隆之をモてる男にしようと思った。
「これとかどうですか？」
「いいんじゃないか」「試着してきます」
　隆之は試着室に向かっていった。残された藍魅は自分の服でも見に行こうと思うといるはずのない高木涼佳がこちらを見ていた。通路に点々と置いてあるここから少し離れた椅子に座り、虚ろな目でこちらを見据えていた。そして何かをブツブツと話している。隆之に聞いたが彼女は仕事と聞いたがなんでこんな場所にしかもここに隆之と藍魅がいることが分かったのだろうか・・？一瞬ゾッとしたがすぐに目を逸らす。目を合わせていると生気を吸い取られるような気分になってきた。
「アイミさんどうですか？」
「え？おお似合ってるじゃん」

隆之はマネキンの着ている服を参考にしながら服を選んだ。初めてにしてはそこそこいいチョイスだった。
「本当ですか！」
「おう！素材は悪くねぇんだ。自信持てよ。折角だ、私が買ってやろうじゃないか」
「え？そこまでしてもらったら申し訳ないですよ」
「何言ってんだ。いいからいいから。わがままに付き合ってくれよ」
「ありがとうございます！」
服を買い終え、二人はどこかで昼食を食べることにした。藍魅は涼佳がここにいてまたこちらをじっと見ていたことを隆之には言わなかった。出るときには涼佳は椅子にいなかった。きっと撮影の合間に休憩で来ていたのだと・・ 信じたかった。
「少し歩くけど商店街に美味いラーメン屋があるんだ。」
「じゃあ行きましょうか」
隆之は藍魅と手を繋ぎ始めた。
「・・・ エスコートってこういうことですかね？」
「やればできるじゃねぇか！エスコート、よろしくな」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
商店街―

休日だというのに閑古鳥が鳴いている商店街であった。ひと気が平日と全く変わらない。両親から聞いたことがあるがニューアクアの建設には商店街は大反対したそうだ。しかし、ニューアクア側は駐車場のない商店街にうちが出来ればきっとそっちにお客が来るとなんとか説得して建設されたが、客など来るわけもなく今のシャッター街が形成されることになった。そんな中で商店街も活性化に向けて色々と取り組んでいるが全てが自己満足という一言で片づけられる始末だ。

さて、隆之が連れてこられたのは藍魅のコーヒーショップのすぐ近くにある中華屋だった。

「いらっしゃい。お、アイミちゃん！弟さんかい？」

「おじさん違うよ。うちの客でさ・・」

「へぇいいねぇ。俺もアイミちゃんとデートしたいなぁ」

「奥さんいるでしょ」「最近じゃ張り合いもないんだよははは で、注文は」「いつもの。２つで」「はいよー」

店主と思われるおじさんと藍魅は楽しく談笑していた。一方隆之は店付きのテレビを見ていた。話の腰を折るのもなんだと思ったからだ。おじさんは注文を受けると調理を始め、バトンを渡される形となった。

「ここも昔は繁盛してたんだ。」

「昔ってここら辺に住んでたんですか？」
「あ、そうか。北口が工業団地だった頃は知らないか‥ ほんの十年前は買い物できるということいえば商店街だった。裏路地は夜の街でサラリーマンがいたもんだ‥ まぁ北口にニューアクアが出来てからは見ての通りだけどな」
「なんとか‥ なんとかお客さんは呼び戻せないんですか？まだ食べてないけどこんなに美味しいラーメンがあって、コーヒーがあって‥」
「‥ 出来ればな。」
藍魅は悲しげに呟いた。変な空気の中、ラーメンがやって来た。醤油ベースの所謂中華そばでとても美味しかった。そして隆之はここには魅力があるのにほとんどの人はそれに気づいていないことが悲しく思った。いや、藍魅やこの街が半ば諦めていることに悲しんでいたのかもしれない。
昼から営業があるということで二人は店で別れることにした。藍魅は店にいてもいいのにといったが1日中付き合ってもらうのは申し訳ないと解散した。藍魅は店のシャッターを開け、開店の準備を始めた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊
ニューアクア廊下―
ショッピングモールの通路に点々とある椅子は足腰の弱い高齢者にとって一里塚に

ある大樹のような小休憩所である。とある老人は買い物疲れで近くにある椅子に座ろうとすると先に女の子が座っていた。老人は隣に座るとその少女はか細い声で何かを呟いていた。しかし老人は気にも止めず暫くすると立ち上がり買い物を続けた。

「殺ス・・・」

秋の頃５（終）

濁流高校―

もう金曜日。明日は高木さんとのデートだが、ここ一週間高木さんは学校に来ていない。僕は高木さんが来ているか高木さんが所属する芸能クラスを訪ねてみた。芸能クラスは僕の所属する普通科とは校舎が違い、彼らを入れるために新しく作った新校舎にある。教員も別々でクズの集まりと言われている濁流高校の生徒とは隔離して学校生活を送っている。そんなクラスに普通科の僕が入っていくのは場違いなのだけど、やはり高木さんのことが気になる。勇気をだして今日も新校舎へ向かった。

網岡拓流大学付属高校タレント学科―

「涼佳なら今日も来てないよ」

「そうですか・・ ありがとうございます」

「それより彼氏から何か聞いてない？涼佳のこと。仕事もすっぽかしちゃってるし、鬼電してもでないしさ」

「僕も電話やメールはしてるんですけど、返ってこなくて・・」

・・・ 芸能クラスは高木さんが人攫いにあったのではないか、など騒然としている。高

木さんは読者モデルの中でもトップにいる今売れっ子だからそうなるのも当然か。いや、そもそも僕みたいなのがそんな有名人の周りにいるだけでも驚きなのに彼氏なんだもんな‥ 本当に僕なんかが彼女でいいんだろうかと考えることが‥ ううん。こんな考えじゃダメだ！藍魅お姉さんに特訓してもらった意味がないじゃないかっ‥‥

『‥‥ やっぱり福本とかいう男みたいに殺されたとか‥ ？』

『涼佳、あの男と遊んでたみたいだしね』

『事件の時にも一緒にいたんでしょ‥ きっと証拠隠滅だよ‥』

‥‥ ？教室のどこかでそんなひそひそ話が聞こえてきた。高木さんが福本くんと遊んでいた？これは別に嫉妬ではなく疑問だった。先週のこと、高木さんは福本くんが亡くなったことを「天罰」とか福本くんを「ごみクズ」とくそみそに罵っていたし、何より殺意を持っていたはずなのになんで遊んでいたんだろう‥‥

『‥‥‥ いつかあのごみクズ〇そうと‥』

‥‥ いやいや。高木さんが実行しようなんてありえない‥‥ 枝木のような華奢な腕では体格のいい福本くんに傷一つもつけられないはずだ。そんな馬鹿なことするわけない。でももしその現場に出くわしていたとしたら‥‥ 高木さんは証拠隠滅で殺され‥ ｔｒｒｒｒ‥‥

最悪の展開を想像していたとき、携帯電話が鳴った。着信の相手は‥‥ 高木さん

だった。動揺を隠しきれず電話を落としかけたが、気を落ち着かせ電話に出た。
「たたた、高木さん?!心配したんですよ。一週間も連絡もしないで」
『心配してくれたの～嬉しいな♡』
一週間ぶりの高木さんの間延びした声にとりあえず安堵する。
「それで一週間何してたんですか?芸能クラスのみんなも心配してましたよ!」
「う～ん・・ちゃんと話すから今から前連れてってくれたコーヒー屋さんに来てくれないかな～?学校だとリュウ君と静かに話せないし・・」
高木さんと話したいのはここにいる芸能クラスのみんなも同じできっと高木さんが学校に来てもあっという間に人垣ができるだろう。先生、クラスメイト・・・優先順位から言えば話せるのはずっと後になる。
「分かりました。10分くらいに着きます!」
電話を切り、芸能クラスを後にする。今は授業中だがこの高校で授業をまともに受けている生徒など誰もいない。それ以前に教室に生徒がパラパラといないということなどザラだ。
通用口から学校を抜け、駅方向に向かって走る。信号を抜け、ニューアクアに入って連絡橋から駅の構内に入って南口に行く。網岡駅は駅の構内に入らずに南側に行く道はここからでは遠く、殆どの人が駅を通って向かう。でもシャッター街と化した南口に

立ち寄る人もおらず人を避けること無く走り抜けられた。駅の階段を降り、２００ｍ先の藍魅お姉さんのコーヒーショップへ一直線に走っていった。

コーヒーショップ―

「はぁはぁはぁはぁ・・・」

１ｋｍにも満たない道を走っただけで息切れをしてしまう。僕は運動が苦手な方だ。こうやってなんでもないことで走るなんて久しぶりのことで体がついていけていない。コーヒーショップに着いたけど、お店は閉まっている。看板や折り畳み式の看板も無く中も照明がついていない。

「本当にここなのかなぁ・・・」

前行ったコーヒー屋とはここのことではないのか？でも、高木さんと最近コーヒーを飲んだのはここしかないはずだ。ドアを押してみる・・・　開いた。休みかもしれないけど「ごめんなさい。お邪魔します」と静かに声を掛け中に入った。

「いらっしゃい♡リュウ君♡」

カウンターの前には高木さんがいた。しかし、客側ではなく藍魅お姉さんがいるはずのキッチン側に。

「駄目ですよ高木さん！そっちにいちゃ」

「大丈夫だよ。今ここには私たちしかいないから」

つまり店番をしているって訳ですか・・・ 本題に入ろうとしたら高木さんが制してきた。

「色々聞きたいことがあるだろうけど～少し昔話をするね・・

昔々、いじめられていた女の子がいました。女の子のおうちは産廃業者でゴミ回収を仕事でしていました。だから女の子はみんなから「ゴミ屋」と言われ生ごみを投げられたり、「近寄るな」と言われていました・・・」

「・・・・」

「でもある日、ある男の子が女の子をかばいこう言いました「人の仕事をバカにするのはよくないんだぞ」って。そして男の子はいじめっ子と喧嘩をはじめ女の子を守りました」

「高木さん・・・」

「その男の子の名前は隆之というので女の子は「タカくん」と呼んでそれから仲良く遊ぶようになりました・・・・・

でもそれは長く続きませんでした。タカくんは地元の公立学校、女の子は私立一貫校に行くことになったからです。そして女の子はまたいじめに遭ってしまいます。ポルノ写真をバラまかれ、殴られたり蹴られたり、モノが無くなったり壊されたり・・・ でも女の子はタカくんとまた会えることを楽しみにしながらそれに耐えました」

「っ……　あ」

「高校入学の時、女の子は地元に久しぶりに戻ります。何故ならあのタカくんと同じ学校に入るためです。どれだけ待ったことか…　女の子は会えることを胸膨らませ入学式を楽しみにしていました。入学式の時はうれしくて抱き着いちゃいました。タカくんは驚いてたけどね♡」

「リョウ…　ちゃん…　？」

「今頃気づいたんだね…　そうだよ。タカくん…　ずっと昔から好きだった。だから邪魔者を消していったんだよ。」

　次々と紡がれていく言葉…　高木さんが幼稚園の頃に仲が良かったリョウちゃんだったこと、そして語られたリョウちゃんの過去。でも最後に異物が入るような言葉が放たれる。『邪魔者を消し』た…　？

「リョウちゃん、それってどういうこと？」

「どうってそのままの意味だよ？まずはあのごみクズから殺ったよ♪タカくんと私の仲を引き裂くだけでも罪なのに、タカくんを傷つけるなんて万死に値するよ♪だって酷いんだよ！あいつを騙して殺そうと思って付き合うふりをしていたのにまだタカくんに別れろって脅してたんだから。だから私がパパに頼んで殺してもらったんだ～」

　まるでいつもフードコートで話すようにリョウちゃんは犯行を自供していく。福本

くんはやはりリョウちゃんの手によって殺されたのか。
「驚かないんだね」
「うん…　事件の時に一緒にいたって噂で聞いたから」
「チッ…　誰だ？始末しないと…」
「リョウちゃん！これ以上罪を重ねるのはやめてよっ！僕はそんなこと望んでない！」
「え？……　ふふっそんな訳ないかっ！だって、タカくんが私を否定することなんてしないもんね。気が動転して素直に喜べないだけだよね♪」
　リョウちゃんは言葉を都合の良いように曲解している。リョウちゃんに罪の意識はないのだろう。善悪の判断は僕を中心にあるようだ。
「それと一番聞きたいのはなんで私が一週間学校に行かなかったか、だよね？」
「うん…　そうだよ」
「あれを見せたほうが早いか」
　そういってリョウちゃんは奥の調理場に入っていった。あれとはなんだろうか？
「こいつを始末するのに手こずっちゃって」
「あ……　あ、あ、」
　高木涼佳が手に載せていたのは…

この店の店主『聖川藍魅』の首だった。

「あああ‥‥　うっ##########」

「もう汚いなぁ。生首見たくらいで吐くなんてだらしないよ。まぁそこもかわいいけどね」

「う‥‥　ぶっ‥‥‥‥　だん〃でぁ〃い〃み〃お〃ね〃え〃ざん〃を〃」

「ダメだよ。あんな女の名前を口にしちゃ」

涼佳は藍魅の首を床に落とす。つまらないおもちゃを見るような目で無慈悲に。そ

して虚ろな目線を隆之に向き直り話を続けた。
「あいつが死んだのはタカくんのせいでもあるんだよ?タカくん、あの女とデート。してたよね?」
「勘違いですそれは…　藍魅お姉さんは僕に自信を付けさせようと…」
「理由なんてどうでもいいの。私以外の女がタカくんに近づいただけで罪だよ。それに、私が他の男になびくなんて絶対ないよ。そのままのタカくんが好きだよ」
「僕は…　僕は……　リョウちゃんを受け入れられない…」
「あっ…」
　隆之は店を飛び出し、逃げようとした。しかし、ドアの先にはサングラスにシャツを着た怖い男たちがいた。
「兄ちゃん、悪いな」
「な、なんですか」
「嬢」
「パパの部下だよ。あまり手荒な真似はしたくないんだけどな…　でもこれ以上逃げるなら…　おい」
「ちょっと眠って貰うぞ兄ちゃん」
　ドッ

鈍い音と同時に腹部に痛みが走る。そして視界は狭くなり、意識はそこでなくなった。

「タカくんが私が受け入れてくれるまでたっぷり『教育』してあげるね…　フフッ」

終わらない